学習指導案（国語科）

指導教諭 [redacted] 教諭 指導者 [redacted]

一 対象 第二学年 A・B・C・D・E・F 組

二 日時 平成二十九年五月三〇日～六月一〇日（土曜日）

三 場所 各第二学年教室

四 単元名（教材名） 随筆 『枕草子』（類聚的章段を中心に）

五 単元について

(1) 教材観

本単元の『枕草子』は、古典の代表的な随筆であり、筆者の豊かな感性と鋭い観察によって、身の周りの出来事や自然について簡潔な文章でまとめられているため、中学生が初めて随筆を学ぶにあたって適切な教材ということができる。また、本単元の「随筆を書く」という目標にあたり、随筆を書くテーマと視点が定まっている類聚的章段を中心に扱うことによって、学習者が随筆を容易に書くことができるようになると考えている。

(2) 学習者観

学習者の課題として、学習者をとりまく言語環境の問題と、学習者自身の自己表現の乏しさがあげられる。現代ではソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）が普及し、LINE や Twitter 上では、思考を巡らすことなしに口語的な短文で言いっ放しにする表現が多く見られる。このことは、特に中学生の SNS 上のやり取りでより顕著に見られる。このようにその場の感情のまま場当たり的に表現することは、他者とのトラブルにつながりかねない。こうした問題の根本的な原因として、学習者が内省的・分析的に自己の考えを表現する能力に乏しいということが考えられる。

(3) 指導観

前項の「学習者観」で述べた学習者の表現上の課題をうけ、本単元では最終的に、「視点を決めて随筆を書き、自己のものの見方・考え方を広げようとする」ことを目的とする。まず生徒が古典の世界に触れ、楽しむ態度を育成するために、ペアで読むことで全員が音読できるようにする。次に、筆者が何を題名の通りに感じているのかを確認し、どういった視点（観点）でそのような評価をしているのかについて考えさせる発問を行う。そうすることによって、随筆を書く際に、単なる個人的な趣味や興味で物事を羅列する文章を書いてしまうことを防ぐようにする。また、第五時に生徒自身で書いた随筆を読み比べることは、自己の見解が広がることを意図している。

六 単元の目標

・身近な生活から題材を探し、視点を決めて随筆を書くことができる。（書くこと）

・『枕草子』を読み、または他者の随筆を読んで、ものの感じ方や考えを広げる。（関心・意欲・態度）

・歴史的仮名遣いの特徴や、読み方に注意しながら音読することができる。（知識・理解・技能）

・一つの観点に則して物事が書かれていることを、『枕草子』から読取る。（読むこと）

七 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	読む能力
・古典に興味、関心を持ち、積極的に課題に取り組むことができる。 ・『枕草子』を読み、または他者の随筆を読んで、ものの感じ方や考えを広げようとしている。	・身近な生活から題材を探し、視点を決めて随筆を書くことができる。	・筆者がどういった視点で随筆を書いているのかを正しく読取ることができる。

言語についての知識・理解・技能
・古典を読むために必要な事項としての基本的な歴史的仮名遣いが読める。 ・古典を理解するために必要な事項としての古語を理解することができる。

八　単元の指導計画（単元目標を達成するための指導計画を示す。）

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価基準（評価の観点）
一	一	・文学史を学ぶ。 ・「春はあけぼの（第一段）」を読むことを通して、随筆の特徴のうちの一つを学ぶ。	・写真を用いて情景を想像しやすくする。	・古典の特徴に注意しながら音読することができる。（知） ・『枕草子』を読み、随筆独特の文章を味わおうとしている。（関）
	二	・「たゆまるるもの（第二十四段）」、「にくきもの（第二十六段）」、「はしたなきもの（第一二三段）」を読み、読み手に共感をよぶ随筆を書く視点を学ぶ。	・何を「たゆまるる、にくし、はしたなし」としているかではなく、どういう視点（観点）を持って作者が書いているのかに着目させるようにする。	・古典の特徴に注意しながら音読することができる。（知） ・随筆を書く視点を正しく理解できる。（読む）
	三	・「すさまじきもの（第二十三段）」、「遠くて近きもの（第一六一段）」、「近うて遠きもの（第一六〇段）」を読み、筆者独自の考え方や言い回しをする随筆を書く視点を学ぶ。	・何を「すさまじ」としているのかではなく、どういう視点（観点）で筆者が書いているのかを考えさせるために、作中にあげられている物事から「すさまじ」の意味を考えさせる。	・古典の特徴に注意しながら音読することができる。（知） ・随筆を書く視点を正しく理解できる。（読む） ・興味、関心を持ち、積極的に課題に取り組むことができる。（関）
二	四	・前時までで学習してきた段の中からテーマを選び、随筆を書く。	・ただ物事を羅列させた随筆を書かないよう、自分の随筆について、どういった視点で書いたのかを説明させる。	・視点を決めて随筆を書くことができる。（書く）
三	五	・他者の随筆を読み、特に優れていると思ったものについて分析する。	・特に優れている随筆を選ぶ際に、単に面白かったからという感想ではなく、どういう視点で書かれていて、どういう点がよかったのかを鑑賞させるようにする。	・他者の随筆を読んで、考えを広げようとしている。（関） ・随筆を正しく鑑賞できている。（読む）

国語科学習指導案　　指導教諭 [redacted] 教諭　　指導者 [redacted]

一　対　象　　第二学年　A・B・C・D・E・F組

二　日　時　　B・D・F組　平成二十九年　六月　三日（土曜日）二・三・四限
　　A組　　平成二十九年　六月六日　（火曜日）二限
　　E組　　平成二十九年　六月七日　（水曜日）三限
　　C組　　平成二十九年　六月八日　（木曜日）三限

三　場　所　　各第二学年教室

四　単元名（教材名）　随筆『枕草子』「すさまじきもの（第二十三段）」「近うて遠きもの（第一六〇段）」
　　「遠くて近きもの（第一六一段）」

五　本時の目標
・観点に則して物事が書かれていることを、『枕草子』から読取る。
（物事に対して、筆者独自の見解がなされている随筆編）

六　本時の評価基準
・筆者の随筆を書く視点について正しく理解しているか。（読むこと）
・筆者独自の見解について理解できているか。（読むこと）

七　本時の展開（第一次　第三時）

	学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点・評価
（導入）5分	・号令 ・前時の振り返り ・本時の目標提示	・前時の振り返りを行う。 ・本時の目標を伝える。	
・「すさまじきもの（第二十三段）」、「近こうて遠きもの（第一六〇段）」、「遠くて近きもの（第一六一段）」の音読	・作業	・「すさまじきもの（第二十三段）」、「遠くて近きもの（第一六一段）」、「近うて遠きもの（第一六〇段）」を机間巡視【音読、学習者をペアにして音読させる。	・筆者が「すさまじ」と言っている事柄を伝え、古文に線を引かせて番号をつけさせる。 ○古典の特徴に注意しながら意欲的に音読できているか。（知） ・線を引く前に、具体例を三つにグループ分けする事を伝える。

	学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点・評価
（展開①）　20分			
	・発問、挙手	●「すさまじ」の響きだけで、マイナスな言葉かプラスの言葉と思うかを問う。 →マイナスなイメージであることを伝える。	
	・「すさまじきもの（第二十三段）」読解	・「昼ほゆる犬」とは、番犬（家を守る犬）を意味し、不審者の侵入を知らせる（追い払う）役割という事を伝える。	
	・発問、発表	●不審者の侵入の可能性が高くなる時間帯はいつか問う。 →夜 ・「昼ほゆる犬」とは、夜ほえてほしいのに、昼にほえるという点において、期待外れという視点であることを伝える。	
	・発問、話合い、（発表）	（相談一分） ●「春の網代・紅梅の衣」は、なぜ「すさまじ」なのかを問う。	・話合いがいきづまれば、随時追発問を行う。（机間巡視）
	（・追発問、話合い、発表）	●「網代」がどの季節のものであるのに、いつの「網代」と言っているか、「紅梅の衣」についても同様に問う。 →季節外れという視点	
	・発問、話合い、（発表）	（相談一分） ●「牛飼・産屋・炭櫃・地火炉」は、なぜ「すさまじ」なのかを問う。	・話合いがいきづまれば、随時追発問を行う。（期間巡視）
	（・追発問、話合い、発表）	●「牛飼」は本来何をすべきか、「産屋」は本来何をする所か、「炭櫃・地火炉」は何を起こすものかを問う。 →牛を育てる、赤ちゃんが産まれる所、火をおこすもの ●それが筆者はあるといっているから、またはないと言っているから「すさまじ」と言っているのかを問う。 →ない	

（展開②）　20分

学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点・評価
・板書	・中心（メイン）となるものがないという視点に対する「すさまじ」ということを説明する。（板書） ・期待、季節外れ、中心となるものがないという三つの視点をまとめて、筆者が「すさまじ」と言っていることをおさえる。	
・発問、挙手	●三つの視点は、そうあるべき事、そうあってほしい事にあっているかないか二択で問う。 →あわない	
・板書	・不調和感（あわない）ことに対しておもしろくないと言っていること（「すさまじ」の意味）を説明する。（板書）	○筆者の随筆を書く視点について正しく理解しているか。（読む）【発問】
・作業	・筆者が「遠くて近い」、「近くて遠い」と言っている事柄を、全員で確認しながら本文に線を引かせ、左記の発問以外の解説をする。	
・発問、話合い、発表	（相談一分） ●なぜ男女の仲が遠くて近いのかを問う。 →実際の距離が遠く、思いあっているという点においては精神的に近いということ。（板書） ＝精神的距離という視点	・男女の仲とは、夫婦や恋人を指す事を伝えるようにする。 ・男女の仲の遠さとして、当時の結婚スタイルである通い婚を伝えるようにする。
・板書		
・発問、話合い、（発表）	（相談一分） ●「思はぬはらから、親族の仲」は何近くて遠いかを問う。 ●きょうだいと親類で共通することは何かを問う。 →血がつながっている	・話合いがいきづまれば、随時追発問を行う。（机間巡視）
（・追発問、話合い、発表）		

	学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点・評価
（まとめ）5分	・板書 ・質問 ・発問、発表 ・発問、話合い、（発表） （・追発問、話合い、発表） ・板書	●思はぬはらからとは、心の距離が遠いか近いかを問う。 →遠い ・心の距離が（精神的に）遠いが、血縁関係はあるから近いということを、筆者が述べていると説明する。 （板書） ＝精神的距離という視点 ●つづら折を知っているか聞く。 ●なぜつづら折が近くて遠いのかを問う。 →直進できれば近いが、実際の道は折れ曲がっていて遠い ＝物理的距離という視点 （相談一分） ●十二月三十一日と、正月の一日が近くて遠いとはどういうことか。 →わずか一日しか経っていないが、一年を隔てるから ●十二月三十一日と、一月一日でどれくらい時間が経っているか問う。 →一日（二十四時間） ●十二月三十一日と、一月一日で何が変わるか問う。 →年 ＝時間的距離という視点（板書）	・「つづら折」は、質問をしてから図を板書する。 ・つごもりの日＝三十一日と誤解を与えないように伝える。 ・話合いがいきづまれば、随時追発問を行う。（机間巡視） ○筆者独自の見解を理解できているか。（読む）【発問】
・号令	・本時の各段での随筆の視点についてもう一度繰り返す。 （・次回予告、随筆を書くことを伝える。どの視点、まずは「共感」の随筆を書くか、「独自の考え方」で書くかを決めておくように言う。）		

『枕草子』　プリント③　清少納言

二　筆者独自の考え・言い回しのもの

○「すさまじきもの」
①期待外れである。
②季節外れである。
③中心（メイン）となるものがない。

◎「すさまじ」の意味は？
①～③に共通すること→あわない
（意味）不調和でおもしろくない。

○「遠くて近きもの」
夫婦の仲、恋仲

◎「人の仲」が遠くて近いとはどういうことか。
遠い存在のように見えて、
心は通い合っているということ。

○「近うて遠きもの」

◎「思はぬはらから、親族の仲」はなぜ近くて遠いか。
血のつながりはあるが、心は離れているから。

◎「つづらをり」はなぜ近くて遠いか。
直線で考えると近いが、実際には何重にも
折れ曲がっているから。

◎「師走のつごもりの日、正月のついたちの日のほど」は、
なぜ近くて遠いか。
わずか一日であるが、年を隔てるから。